

SHOW ができるまで

専修大学文学部日本文学文化学科 川上隆志ゼミナール 3 年
阿久津英恵、岡田健太郎、加藤倫、芝本一樹、山下寿美恵

1. SHOW とは

『SHOW』とは、年に一度私たち専修大学文学部 日本文学文化学科 川上隆志ゼミナールが発行している雑誌。この『SHOW』は、専修の頭文字「S」と、どうして・どのようにという意味の「HOW」を組み合わせて、毎年私たちが気になったこと、疑問に思ったことを企画として詰め込み、読者の方にも見せて（SHOW）共有することで、「知る」きっかけ、「考える」きっかけ、「気付く」きっかけを届けたいという願いが込められている。

雑誌製作は、毎年 2・3 年生が中心となって、前期に企画を立案・選考し、夏休みに取材や情報収集、後期には Adobe のソフトでページ制作・修正を重ね、12 月中旬に完成・発行という多忙なスケジュールで動いている。

そんな『SHOW』も今年で 18 号目を迎え、本校の学生や教授、OB・OG、出版関係者の方々など、たくさんの方々に読んでもらえる雑誌に。この発表で、さらに多くの読者や興味を持つ人が増えてくれると幸いだ。

2. 歴代の『SHOW』

2.1. 『SHOW』NO.1「大学生の雑誌、はじめました。」

2007 年に発行された、川上隆志ゼミナール初の雑誌。雑誌制作の全てを学生主導で行うことを目指して始められ、その精神は 2023 年の最新号の制作まで続いている。「のぞき見出版

界」「いつもあなたの側にあるサブカル!!」「カレッジスポーツに己を懸ける！」の 3 つを特集企画に掲げ、その他 3 つの企画を収録している。

2.2. 『SHOW』NO.10「東京・LGBT」

2015 年に発行された、『SHOW』の記念すべき 10 周年目の雑誌。「東京」をテーマとして「生きる×東京」「激変する街」、「LGBT」をテーマとして「自分らしい生き方をデザインしよう！」という 3 つの特集企画と共に、企画 9 個、SHOW10 周年記念企画、日本語学科とのコラボ企画を収録している。2015 年は様々な自治体で同性パートナーシップ条例などが公布されたり、企業においても LGBT 施策が広がりを見せたりした年ということもあり、時事性に富んだこの号は歴代の『SHOW』の中でも評判の一冊である。

2.3 『SHOW』NO.18「ZAWAZAWA」

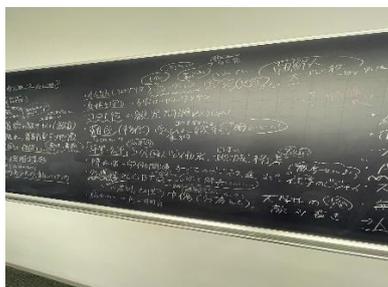
2023 年に発行された『SHOW』の最新号。「つながり」「アイデンティティ」の 2 つをテーマとして掲げ、前者の特集として「どう生きる、無縁社会」、後者の特集として「サクラモト」を収録する。その他、ゼミ生が自由な発想で考えた 13 個の企画、日本語学科とのコラボ企画も掲載されており、様々な事柄に気が付く度に誰かと共

に「ザワザワ」と語りあってほしいという願いから「ZAWAZAWA」と名付けられた。

3. 制作過程① 軸決め

2週に分けて行った。特集にしたいと思う社会問題を1人10個ずつドキュメントファイルに記して、Google driveのゼミ内共有フォルダに提出し、それをもとに今年度のSHOWの特集テーマとしたい内容を大まかに話し合った。この目的として、編集部全体でそれぞれに関心のある社会問題を把握し共有することが挙げられる。

2周目は特集会議に繋げるため、1周目でおおまかに今年の編集部の興味の傾向を共有した上で、さらに個々人で考慮し、各ゼミ生が2つの案を出した。数を絞ることで、各々の興味がより明確にし、雑誌としての方針を固めることを目的とした。



4. 制作過程② 特集会議

軸決めに出ていたおおまかなテーマの中から、特にゼミ生の興味が引いた話題がそれぞれの6つグループに選ばれ、実際に企画書を作成して特集会議を行った。企画したグループのプレゼンテーション、それを聞いた後の質疑応答などを通して企画自体のブラッシュアップをするとともに、実際にどの企画を採用して今年度の特集とするか検討された。



5. 制作過程③ 企画会議

特集企画がある程度固まったところで、特集企画の細部を話し合う特集中心者以外は新しく考えた企画の会議を行った。雑誌の構成、企画の実現性、社会問題に学生視点で触れられているかなどを考慮した結果、今年度は13個の企画が採用され、各々8月から始まる取材や調査に向けて準備を始めた。

6. 制作過程④ 取材準備

企画会議の後、各企画者は必要に応じて取材対象に連絡を取る。趣旨、質問内容等を説明し日程を調整する。取材に先んじて、より詳細な質問事項、誌面の構成などを大まかに決定して取材に臨む。



↑編集部LINEグループにて日程を共有

7. 制作過程⑤ 取材

二人以上での行動が原則となっている。インタビューでは準備した質問を中心としながらも、取材相手の話す内容に応じて

臨機応変に対応する。その際ボイスレコーダーで録音する。インタビュー以外に重要になるのが、写真撮影である。あらかじめ考えた誌面の構成を基に意図をもって写真撮影をする。また、様々な可能性を考慮して複数の構図で撮影することを意識する。

8. 制作過程⑥ 誌面づくり(原稿&デザイン)

誌面作りでは、原稿を作るためにまず取材してきた音声データをもとに文字起こしをする。文字起こしした文章では記事にできないため、その文章を意味が通るように整える。しかし、方言や口語表現などのインタビューの特性が出ている文章はそのままにする。

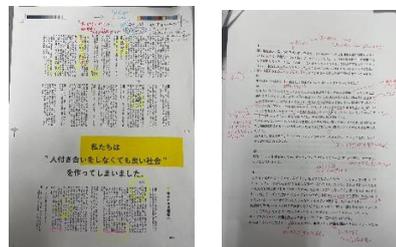
作った原稿をもとに夏休みの内に考えてきたレイアウト案を参考に InDesign で誌面をつくる。InDesign での作成は夏休み前に InDesign 講習会を開いたが、特に2年生は InDesign を実践的に使う初めての機会であるため、かなりの時間と労力を要する。

9. 制作過程⑦ 校正

Google ドライブで提出された原稿を、校正表をもとに誤字脱字、文章の違和感などを指摘し、訂正する。校正する。文章を校正する際に注意すべき点は、校正の基準をしっかりと決めることである。雑誌全体で校正の基準を決めていなければ、校正を担当した人によって漢字であるか、ひらがなであるかがバラバラになり統一感がなくなる。

誌面として提出されたものもビジュアル

係が違和感をもった部分を指摘する。誌面のデザインは企画担当者一人で考えていると迷走することが多いため、別の人からの意見が非常に大切になる。



10. 制作過程⑧ 流し込み

各企画担当者が制作してきた誌面を一つのパソコンに集約する。流し込み期間を一週間設け、一週間内で各企画担当者が空いている時間に、製作係がゼミのパソコンに各企画担当者がつくってきた記事を流し込む。流し込んだ後にエラー表示が出た場合は対処する。今回の流し込みは多くの企画でカラー設定が上手くいっておらず、修正の必要があった。

制作過程⑥、⑦、⑧を3回繰り返す。

11. 制作過程⑨ 刊行(最終入稿→印刷)

3回目の流し込み後、5日間かけて校正やレイアウトチェックを行い、最終入稿日を迎えた。印刷所の方に、InDesign のデータをPDF化しメールで提出する。後日、印刷所へ3年編集部幹部と次年度の編集部幹部生1名で伺い、誌面の最終チェックや出来上がった雑誌の配送日時の確認をした。印刷所の方からご指摘を頂いたり、自分たちで気づいたりして見つけた、修正が必要な箇所は、印刷所に伺った後、その日のうちに修正する。この入稿をもって、一度全てのデータ編集作業が終了となる。

12. 制作過程⑩ 刊行（配本）

無事に印刷を終えて製本された雑誌は、取材にご協力いただいた方たち、同学科のゼミナール、学内の図書館や入学センターなどの各種施設、弊ゼミナールのOB・OG、メディア関係や希望者など、様々な人に配本・配送される。学内で学生が回ることでできる施設などへはゼミ生たちが分担して一冊ずつ配り、直接手渡しすることの叶わない人や施設へは送り状を添えて配送している。今年度刊行した『SHOW No.18』は、約1200冊を配本・配送をした。来年度入学する予定の新1年生に対しては学科内のゼミナール紹介の場で配り、ゼミ選びのための1つの材料にしてもらうことになっている。



13. 制作過程⑪ 反省会&電子書籍化

配本・配送作業を終えた翌週のゼミから、反省会を2~3週に分けて行う。出来上がった雑誌の1ページ1ページに目を通し、誤字脱字やレイアウト修正箇所などの制作的な面から文章表現などの内容面まで、次号に活かせるように反省点を活発に出していく。

また昨年度から、反省会後には、挙がっ

た反省点の中で修正できる範囲の箇所を、InDesignで直していき、PDF化した誌面データを、Romancerというサイトを用いて電子書籍化している。

14. 制作から得た課題

多くの企画で誌面の余白の使い方の問題が挙げられた。誌面に余白が少なく一目見たときに記事に圧迫感を感じる。この原因として2つあげられる。1点目はデータ、紙のイメージの乖離である。多くの企画者が思ったより写真が大きくなったと想定していたサイズ感とは異なると反省をしていた。2点目は、全体的な構成の統括不足である。各企画者が担当ページに集中しすぎてしまい、ページごとの情報量に緩急がなくなってしまった。

もう1つの課題として雑誌としての統一感のなさである。企画者それぞれが利益、立場にとらわれず自由な発想、純粋な興味で企画できてしまうが故に、雑誌としてテーマにばらつきが出てしまうことがここ数年の課題であり、今年度号も狙った統一感を出すことはできなかった。原因として、企画・コラムに対する認識が編集部と企画者で共有できていなかったことが一番に挙げられる。特集会議時点ではゼミ生全員が特集企画に協力し、事前調査や、特集発案者との話し合いに成功していたが、その意識を軸に企画・コラムの発案に影響させることができなかった。

15. 結び

雑誌制作にあたって、例年の活動を目の当たりにして大変な労力がかかることは承知していたが想定以上に心身ともに体力のいるものだと感じた。テーマ会議、企

画会議で発散された意見を雑誌として1つの軸に落とし込んでいく難しさ、自分の企画をより意義あるものにするための準備、取材相手・印刷所等のゼミ外に協力していただいた方への責任、編集、校正、データの流し込み等スケジュールのシビアさなどに疲弊しながらも、充実した雑誌制作を行うことができた。

そして最後に、本雑誌の制作にあたって、快く取材に応じていただきました関係者の皆様を始め、取材のご指導をしていただきました大塚明子様、短期間で仕上げてくださいましたヨシダ印刷様に心より感謝申し上げます。



『SHOW』 専修大学文学部日本文学文化
学科 川上隆志ゼミナール
編集長：阿久津英恵
副編集長：岡田健太郎
ビジュアル長：山下寿美恵
校正長：加藤倫 製作長：芝本一樹
指導教員：川上隆志 特別協力：大塚明子

電子書籍版&読者アンケートも是非！！

【電子版📖】 <https://x.gd/rzwNZ>

【読者アンケート📧】 <https://x.gd/9uWAJ>



【電子📖】



【アンケート📧】